

病院・大学連携による視聴覚教材を用いた 看護学生への退院支援に関する教育実践の評価

高田由美¹⁾, 佐藤美恵子¹⁾, 疋田由香¹⁾, 東美奈子²⁾

Evaluation of educational practice on discharge support for nursing students using audiovisual materials and hospital-university collaboration

Yumi TAKADA, Mieko SATO, Yuka HIKITA, Minako AZUMA

要旨：本報告の目的は、視聴覚教材を用いた退院支援に関する教育実践の実際を報告し、学生の学びを基に教育実践の評価をすることである。

教育実践は、老年看護学実習Ⅱを履修したA大学3年次生41名を対象に行った。実習病院と連携し、事例の入院から退院までの退院支援の過程を示す視聴覚教材を作成した。視聴覚教材は、事例の入院1週間以内と1週間以降の2回に分けて視聴し、個人ワークとグループワークを行った。その後、実習病院の看護師が同席し、グループワークの発表及び意見交換会を行った。

学生が発表会直後に記載した実習記録の内容を分類整理した。その結果、退院支援に関する学び2つと退院支援における看護師の役割に関する学び5つ、退院支援で看護師の役割を果たすために必要な知識・技術に関する学び1つに整理できた。

学生は、退院支援のしくみや看護の役割について理解できており、本教育実践の学習目標は達成できていた。また、実際の退院支援部門での実習の学びと類似しており、見学実習に相当する学びを得られる方法であると評価した。

リアルな退院支援の場면을イメージするため、病院と連携し視聴覚教材を作成したことや退院支援に関わる看護師との意見交換会を設けたことが効果的であったと考えられた。

キーワード

看護学生, 退院支援に関する教育, 視聴覚教材, 病院と大学の連携

Abstract : This study assesses and describes the current status of audiovisual-based education on discharge support, as determined from the learning outcomes reported by students. Forty-one third-year students at University A who had completed a Geriatric Nursing Training II course were included in the educational practice. We prepared audiovisual materials to demonstrate, in collaboration with a teaching hospital, the process of supporting patients from admission to discharge focusing on discharge support. The students watched the audiovisual materials twice—within and after 1 week following patient hospitalization—and then performed individual and group work. The results of the group work were then presented in the presence of nurses from the teaching hospital, and the participants exchanged views. We categorized and sorted the training records submitted by the students immediately after the presentation meeting. The results were as follows: 1) two items learned regarding discharge support; 2) five items learned regarding the role of nurses in supporting discharge; and 3) one item learned regarding the knowledge and skills required to fulfill the nursing role in supporting patient discharge. The students seemed to fully understand the discharge support system and the role of nursing, indicating that the learning goals of the educational practice had been achieved. In addition, the learning outcomes that they reported were similar to those obtained from the field observation training provided by the department supporting discharge. Therefore, we concluded that this practice was a beneficial addition to the practicum to achieve the learning outcomes.

Keywords :

nursing student, education on discharge support, audiovisual material, hospital-university collaboration

受理日：2024年9月10日 掲載決定日：2024年10月31日

1) 日本赤十字秋田看護大学：Japanese Red Cross Akita College of Nursing

2) 独立行政法人 地域医療機能推進機構 秋田病院：Japan Community Health care Organization Akita Hospital

I. はじめに

2025年の高齢者人口がピークとなる日本は、従来の「病院完結型」医療から変化をせざるを得ない状況にある。病気や障害と共存しながらQOLの維持・向上を目指し、住み慣れた地域や自宅での生活のための医療として、地域全体で高齢者を支える「地域完結型」医療への転換が求められている（厚生労働省，2013）。看護基礎教育においても、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、多職種が連携して適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されており、その中で看護職には対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められている（厚生労働省，2019）。また、看護教育の基本的な考え方として、「保健・医療・福祉システムにおける自らの役割及び他職種の役割を理解し、多職種と連携・協働しながら多様な場で生活する人々へ看護を提供する基礎的能力」の養成が挙げられている。2020年の看護師指定規則の改正においては、実習の留意点として保健・医療・福祉との連携、協働を通した切れ目のない看護を学ぶことが強調された。

A大学においては、老年看護学実習を行う実習施設の一部に療養病棟が含まれており、患者の入院期間が延長する特性から退院支援に対する見学や体験は実施困難な状況にあった。その対策として、病棟実習終了後の学内実習において実習グループを再編成し、異なる病棟による実習体験を共有する場を設けていたが、学生全員が入院患者への退院支援のプロセスの基礎知識を習得することは課題となっていた。

社会情勢の観点からは、2020年に厚生労働省は入退院支援加算の内容を見直し、入院前の段階から、入院予定患者の病状と療養背景の把握、退院後までのスムーズな流れをつくるという診療報酬改定により、地域包括ケアシステムの推進のための取組の評価を行うようになった（厚生労働省，2020）。また、基礎教育における退院支援に関する知識や技術は、看護師国家試験の出題基準（厚生労働省，2022）において、在宅看護分野の「療養の場の移行に伴う看護」、老年看護学分野の「多様な場で生活する高齢者を支える看護」にそれぞれ設置され、看護師国家資格を目指す学生に求められる学習項目である。このような背景から、基礎教育の段階から、入院中の患者に対する退院支援をより深く学ぶ教育実践を検討することは意義

がある。

看護基礎教育において、病院から地域へ切れ目のない看護を学ぶための教育実践に関する報告はいくつかある。これらの報告において、成人看護学実習で学生が担当した事例を用いた退院支援のアセスメントを実施する（室田ら，2018）、統合実習で退院調整看護師の役割を通じて退院支援を学ぶ（竹崎，2020）など、実際の事例を基にした教育実践が退院支援についての理解を促進させることがわかっている。臨地実習の場合は変化に富み、学生が退院支援に関する見学や体験を必ずできる保証はないものの、その点をどのように補充したら学習成果を上げられるのかという教育実践については検討されていなかった。

そこで本報告では、老年看護学実習において、学生全員が同一の視聴覚教材を用いた退院支援に関する教育実践の実際を報告し、受講した学生の実習記録による学びを基に、本教育実践を評価する。

II. 目的

同一の視聴覚教材を用いた退院支援に関する教育実践（以下、教育実践）の実際を報告し、学生の学びを基に本教育実践の評価をすることを目的とする。

III. 方法

1. 本教育実践の位置づけ

A大学の老年看護学実習は、老年看護学実習Ⅰ（1単位）と老年看護学実習Ⅱ（3単位）で構成されている。このうち、老年看護学実習Ⅱは、老年期の健康及び生活の問題を多面的に理解し、看護に必要な知識・技術・態度を学ぶことを目的とした1クール3週間の実習である。具体的には、1～2週目は入院中の高齢患者を受け持ち看護展開する病院実習、3週目は退院支援を主とした学内実習である。

本教育実践は、3週目に行っている退院支援の実習目標である「病院から在宅・施設に繋げるしくみを知り、看護の役割について考察できる」を達成させるために設計した。今回対象となったのは、2023年10月から11月の1～2クールにおいて実習をした3年次学生41人である。

2. 用語の定義

退院支援とは、退院後も医療管理や看護・介護

が必要な状況である高齢者に対して、高齢者が抱える「退院後も継続するであろうと予測できる問題」について入院時からアセスメントをし、高齢者が望む生活の場に移行するまでのプロセス全体を支援することと定義する（亀井，2023）。

3. 退院支援に関する教育実践の設計

本教育実践を設計するにあたり、学校で教える基礎知識の間のつながりを適切な質問と指導を通して理解させ、さらに自らの体験に結びつけた知の応用に発展させて、深い学びを促すICEアプローチ（Young & Wilson 2000/2013）を参考とした。2年次までの講義で学んだ知識と実習での体験とのつながりをイメージさせるため、模擬事例（以下、A氏）の入院から退院までの過程を描いた視聴覚教材を用いた個人ワークとグループワークを組み入れた。また、グループワークの成果発表と退院支援に関わる看護師との意見交換会を設けた。

退院支援に関する視聴覚教材を作成するにあたり、病院敷地内に病院附属の介護老人保健施設、健康管理センター、訪問看護ステーション、地域包括支援センターを有し、地域包括ケアを推進している実習施設の看護部から協力を得た。事例のシナリオは、A氏が自宅で転倒し、大腿骨頸部骨折のために入院、手術治療とリハビリテーションを経て、自宅へ退院するまでの過程を示したものとした。より臨場感を持たせるため、実習施設の看護師からの意見や指導を受け、「（模擬）患者家族への医師からの病状説明」「患者の家族の不安に対する看護師の対応」「退院支援及び退院調整カンファレンス」「退院前訪問」をイメージできる写真とセリフを取り入れた音声付スライド48枚の視聴覚教材を作成した。なお、写真は実習施設の看護師らが模擬場面を設定して撮影を行ったものを用いた。

4. 教育実践の学習目標と学習内容、進め方

（表 1 参照）

本教育実践は、老年看護学実習Ⅱの病棟実習10日間終了後の実習11日目以降の学内実習3日間で行った。高齢者への退院支援では、入院時にすでに退院時のことを思い描けるような本人・家族への動機づけが必要不可欠（亀井，2024）とされている。そのため、教育実践は学内実習の初日（実習11日目）と2日目（実習12日目）の2日間に分

けて実施した。

初日（実習11日目）は、骨折で緊急入院したA氏と家族が医師から今後の治療について説明を受けるまでの経過を示す動画を視聴した。その後、学生はA氏と家族の立場に身を置き換えて、入院治療後に「帰りたい場所」を考える個人ワークに取り組んだ。このワークは、退院先のリストから「帰りたい場所」を3つ選定し、それぞれのメリット・デメリットを調べ、最終的にそのうち1つに決定するものであった。このワークへの取り組みにより、学生自身が退院後に生活する場所をリアルにイメージしながら学習できるように工夫した。

2日目（実習12日目）は、A氏の入院1週間以降の病状経過と退院に至るまでの経過を示す動画を視聴した。動画中には、A氏と家族が退院後に希望する自宅での生活において、介護サービスを利用するための手続きやその所要期間を具体的に説明した。これにより、患者や家族が入院後早期から退院後の生活をイメージすることの重要性を理解できるように工夫した。

最終的に、2日間の動画視聴と個人ワークを基に、グループで入院中からA氏と家族が希望する場所に退院することが可能となるように、各専門職種は“いつ”“どのような役割”を果たしているのかを表や図を用いてまとめ、看護師の役割を考察するワークに取り組んだ。そして、実習施設の看護師と日程調整が可能な学内実習4日目（実習14日目）に、グループワークの発表と意見交換を実施し、退院支援に関する学びを総括した。

IV. 教育実践の評価

1. 評価対象と評価方法

評価対象は、グループワークの発表と意見交換会終了後に、学生が実習記録に記載した退院支援に関する学びとした。

実習記録に記載した内容を研究者3名で熟読し、実習目標のキーワード「病院から地域・在宅につなげるしくみ」、「看護の役割」の2点に着目し、意味内容の類似性に基づいて質的に分類整理したものを中項目とし、さらに抽象度を高めて大項目とした。次に、実習記録で得られた中項目について、看護師国家試験出題基準の老年看護学の大項目「多様な場で生活する高齢者を支える看護」「D. 生活の場を変える高齢者への支援」の小項目（キーワード）との関連性を比較した。得られ

た結果については、研究者間で合意が得られるまで検討を重ね、妥当性の確保に努めた。

これらの結果を基に、教育実践による学生の学習目標の達成度を確認し、退院支援を学ぶ教育実践としての内容と方法について評価した。

2. 倫理的配慮

学生には、教育実践の開始前に、研究目的とともに研究協力は自由意思であること、成績評価に一切関係しないこと、個人名などのプライバシーは保護されることを口頭で説明し、実習記録の使用に対する同意を得た。また、実習記録を用いた調査によって得られた研究成果は、匿名性を守ったうえで学会や紀要で公表することを説明し同意を得た。

V. 結果

学生の実習記録を分類した結果、退院支援に関する学び2つと退院支援における看護師の役割に関する学び5つ、退院支援で看護師の役割を果たすために必要な知識技術に関する学び1つに整理された。

以下、大項目を【】、中項目を<>、学生の記述内容を「」とし、それぞれの学びについて説明する。

1. 退院支援に関する教育実践による学生の学び

1) 退院支援に関する学び

【退院支援のしくみについて】とは、<患者が退院するまでに多くの職種が関与する><外来から入院・退院においての継続的な支援である>

表1. 教育実践の学習目標と学習内容、進め方

	学習目標	学習内容
1日目	1. 早期からの退院支援の必要性について説明できる。 2. 退院支援に必要な情報について列挙できる。	グループワーク：視聴覚教材「病院から在宅・施設へつなげるしくみ」の「入院から病状説明まで」を視聴する。「A氏の退院を検討するために必要な情報について」をグループでディスカッションする。 個人ワーク：次の課題を調べてまとめる。 ・社会情勢と医療体制システムによる高齢患者の療養環境に与える影響 ・地域包括ケアシステムや介護保険制度の概要 ・「帰りたい場所はここ」＊ワークシートを行う。 ＊学生自身がA氏と家族の立場に身を置き換えて、入院治療後に退院したい場所を考える課題である。退院先のリストから退院したい場所を3つ選定し、それぞれのメリット・デメリットを調べ、最終的に退院したい場所を決めるものである。
2日目	3. 患者と家族のニーズに沿った退院支援の重要性について確認できる。 4. 退院支援に向けた看護援助について説明できる。 5. 退院支援で連携する職種や役割について説明できる。 6. 患者に必要な医療・介護が継続して提供するための方法について説明できる。	グループワーク：視聴覚教材「病院から在宅・施設へつなげるしくみ」の“手術後から入院後1週間以内の退院支援カンファレンスから患者教育まで”を視聴する。A氏の退院支援に必要な情報や援助についてグループでディスカッションする。 「帰りたい場所はここ」ワークシートを基に、グループメンバーで共有する。 個人ワーク：視聴覚教材「病院から在宅・施設へつなげるしくみ：入院1週間以降の退院支援カンファレンスから退院まで」を視聴し、個人で次の課題に取り組む。 ・A氏の退院支援に係わる専門職種（看護職含め）の役割や機能 ・A氏が退院後も引き続き必要とする医療・介護を継続するための方法
3日目	7. 多職種で取り組む退院支援のプロセスが整理できる。 8. 退院支援における看護の役割を説明できる。	グループワーク：これまでの学習を次のア～ウの視点でまとめる。 ア. 退院支援の経過のなかで、各専門職種は“いつ”“どのような役割”を果たしているのかを表や図を用いてまとめる。 イ. 病棟看護師は、退院支援において患者と家族にどのように支援することが必要だと考えるか。自分たちの考えをまとめる。 ウ. 退院支援についてもっと学びたいことや理解したいと思ったことをまとめる。 グループワーク発表と実習施設の看護師との意見交換会の実施。

表 2. 退院支援に関する教育実践による学生の学び

大 項 目		中 項 目	国家試験出題基準の小項目*との関連
退院支援のしくみに関する学び	退院支援のしくみについて	患者が退院するまでに多くの職種が関与する(16)	退院支援
		外来から入院・退院においての継続的な支援である(13)	
		多職種の専門性(強み)を生かしたサービス提供である(7)	看護職間・他職種間の情報提供
		入院早期から退院支援を行う意義がある(9)	退院支援
		今後の社会状況を見据えた支援体制である(4)	
	退院支援のしくみを円滑に運用するために必要なこと	患者と家族の意思に添えるように退院支援を行う(8)	退院支援
		多職種の専門性を理解して多職種連携を図る(6)	看護職間・他職種間の情報提供
		患者・家族と多職種で目指す方向性を統一する(7)	目標の共有
		退院支援における個人情報保護に留意する(3)	退院支援
退院支援における看護師の役割に関する学び	入院早期から退院後の生活に向けた支援	入院早期から住環境に関する情報収集を行う(5)	入院時の援助
		入院中から退院後の生活への影響を予測しながら援助する(12)	
	患者と家族の気持ちを尊重した退院支援	患者や家族の退院に対する希望や思いを把握する(8)	退院支援
		患者と家族の気持ちに配慮した意思決定支援を行う(9)	
		患者と家族の退院後の生活に関する不安を軽減する(13)	
	患者と家族の退院に対する意見調整をする支援	退院後の生活に関する患者と家族のニーズを繰り返し確認する(9)	目標の共有
		患者と家族が退院の意向を共通認識できるように働きかける(10)	
		家族が患者の状態を医療者と共通認識できるように関わり続ける(9)	
	退院後の生活を考慮した情報提供や支援	患者が退院後の生活のイメージをもてるようにかかわる(3)	退院支援
		退院後も患者が生活を継続できるように支援する(6)	
		患者の強みを生かしたセルフケアを行うよう促す(5)	
	他の施設やサービスを行う職種との連携の実践	患者家族に関する情報を多職種と共有する(12)	看護職間・他職種間の情報提供
		退院支援に関連する多職種間の連絡・調整を行う(6)	
		退院後も継続した支援を提供できるような体制を多職種と共に整える(5)	サービス利用開始時の援助
退院支援で看護師の役割を果たすために必要な知識技術に関する学び	退院支援をする看護師に必要な知識技術、態度	退院支援のために地域の社会資源の把握が必要となる(5)	該当なし
		退院支援を判断するためのアセスメント能力が必要となる(2)	
		患者の本音を知るためには信頼構築が必要である(1)	

() 内は中項目を構成する学生の記載数

* 看護師国家試験出題基準、老年看護学の9. 多様な場で生活する高齢者を支える看護、D.生活の場を変える高齢者への支援の小項目(キーワード)である

＜多職種の専門性（強み）を活かしたサービス提供である＞＜入院早期からの退院支援を行う意義がある＞＜今後の社会状況を見据えた支援体制である＞の5つの中項目から構成されている。これは、患者の入院から退院するまでのプロセスで受ける支援に関与する職種や連携のありかた、退院支援の重要性についての学びを示す。

【退院支援のしぐみを円滑に運用するために必要なこと】とは、＜患者と家族の意思に添えるように退院支援を行う＞＜多職種の専門性を理解して多職種連携を図る＞＜患者・家族と多職種で目指す方向性を統一する＞＜退院支援における個人情報保護に留意する＞の4つの中項目から構成されている。退院支援を円滑に運用するために、患者と家族の意思尊重、多職種の役割理解、統一した方針、個人情報保護の必要性についての学びを示す。

2) 退院支援における看護師の役割に関する学び

【入院早期からの退院後の生活に向けた支援】とは、＜入院早期から住環境に関する情報収集を行う＞＜入院中から退院後の生活への影響を予測しながら援助する＞の2つの中項目から構成されている。これは、患者が退院後の生活にスムーズに適應できるように、退院が決定する前から退院に向けた支援を行う役割を学んだことを示す。

「病院の方のお話の中で、スムーズな退院調整を行うにあたって『住環境』の情報をできるだけ早く収集することが重要だということを学んだ」

【患者と家族の気持ちを尊重した退院支援】とは、＜患者や家族の退院に対する希望や思いを把握する＞＜患者と家族の気持ちに配慮した意思決定支援を行う＞＜患者と家族の退院後の生活に関する不安を軽減する＞の3つの中項目から構成されている。これは、患者への退院支援が始まる段階から経過を見据えて、患者と家族の退院に対する思いを把握し、意思決定支援や退院後の生活や療養に関する不安を軽減する役割を学んだことを示す。

【患者と家族の退院に対する意見調整をする支援】とは、＜退院後の生活に関する患者と家族のニーズを繰り返し確認する＞＜家族と患者が退院

の意向を共通認識できるように働きかける＞＜家族が患者の状態を医療者と共通認識できるように関わり続ける＞の3つの中項目から構成されている。これは、入院時や治療経過のなかで、患者と家族の退院に対する意向が異なる、あるいは変化する場合を想定し、患者家族双方の意向を調整する役割を学んだことを示す。

「入院した時点で互いの意見を確認し、定期的な家族への電話で現在の患者の状態や治療状況などを説明し、少ない面会のなかでも退院先に関する意見に大きく差がでないように少しずつ意見をすり合わせて対応しているということを学んだ」

【退院後の生活を考慮した情報提供や支援】とは、＜患者が退院後の生活のイメージをもてるようにしかかわる＞＜退院後も患者が生活を継続できるように支援する＞＜患者の強みを生かしたセルフケアを行うよう促す＞の3つの中項目から構成されている。これは、患者が退院後の生活に必要な体力や知識、社会資源の準備ができるように助言やサポートを行う役割を学んだことを示す。

【他の施設やサービスを行う職種との連携の実践】とは、＜患者家族に関する情報を多職種と共有する＞＜退院支援に関連する多職種間の連絡・調整を行う＞＜退院後も継続した支援を提供できるような体制を多職種と共に整える＞の3つの中項目から構成されている。これは、患者や家族との情報を多職種で共有し、看護師が主導となって他の職種との調整や退院後の生活が継続できるような体制づくりを行う役割を学んだことを示す。

3) 退院支援で看護師の役割を果たすために必要な知識技術に関する学び

【退院支援をする看護師に必要な知識技術、態度】とは、＜退院支援のために地域の社会資源の把握が必要となる＞＜退院支援を判断するためのアセスメント能力が必要となる＞＜患者の本音を知るためには信頼構築が必要である＞の3つの中項目から構成されている。これは、看護師が退院支援における役割を果たすうえで、必要となる知識技術や態度を学んだことを示す。

2. 退院支援に関する教育実践による学生の学びと国家試験出題基準との比較

看護師国家試験出題基準の老年看護学の大項目「多様な場で生活する高齢者を支える看護」「D. 生活の場を変える高齢者への支援」に挙げられた小項目（キーワード）（以下、“ ”で示す）を本教育実践の結果と比較し検討した。

“入院時の援助”については、今回の結果である＜入院早期から住環境に関する情報収集を行う＞＜入院中から退院後の生活への影響を予測しながら援助する＞と一致した。また、退院後の“サービス利用開始時の援助”をするために調整しておく内容として、＜退院後も継続した支援を提供できるような体制を多職種と共に整える＞ことが挙げられていた。“看護職・他職種間の情報提供”については、＜多職種の専門性（強み）を生かしたサービス提供である＞＜多職種の専門性を理解して多職種連携を図る＞＜患者家族に関する情報を多職種と共有する＞と一致していた。“目標の共有と評価”については、＜患者・家族と多職種で目指す方向性を統一する＞＜患者と家族が退院の意向を共通認識できるように働きかける＞＜家族が患者の状態を医療者と共通認識できるように関わり続ける＞と目標の共有と類似する部分はあったが、“目標の評価”に類似する内容は見当たらなかった。

VI. 考察

退院支援と退院支援における看護の役割を学ぶために、A氏の入院から退院までの過程を示す視聴覚教材を視聴し、グループワーク、個人ワーク、グループワークの発表と意見交換会を組み込んだ教育実践を行った。すべての教育実践を終了した後の学生の実習記録を分析した結果、退院支援に関する学び2つと、退院支援における看護師の役割に関する学び5つ、及び退院支援で看護師の役割を果たすために必要な知識技術に関する学び1つに整理された。また、得られた学びと国家試験出題基準の小項目との比較を行った結果、ほぼすべての項目を網羅するものであった。ここでは、本教育実践における学習目標の達成度とその理由について考察し、教育実践を評価する。

1. 教育実践における学習目標の達成度について

1) 早期からの退院支援の必要性について説明できる

【退院支援のしくみについて】にある＜入院早期から退院支援を行う意義がある＞にみられるように、学生は、患者の入院早期から最善な退院先の決定や患者や家族の思いに寄り添った支援に繋がる意義を理解できていた。個人ワークの「社会情勢と医療体制システムによる高齢患者の療養環境に与える影響」と、意見交換会で看護師から退院支援の実際を聞いた内容が関連づけられたと考える。

2) 退院支援に必要な情報について列挙できる

看護師の役割として＜入院早期から住環境に関する情報収集を行う＞が挙げられており、具体的な内容としては「退院後の生活」「住環境」という記載があった。この度の視聴覚教材には「退院前訪問」の場面があったこと、意見交換会の場で看護師から「住環境」についての情報収集をする必要性を直接聴いたことが退院支援に必要な情報を列挙することに役立ったと考えられる。

3) 患者と家族のニーズに沿った退院支援の重要性について確認できる

【退院支援のしくみを円滑に運用するために必要なこと】には＜患者と家族の意思に添えるように退院支援を行う＞にみられるように、患者家族のニーズに沿う退院支援の重要性について学習できていた。また、看護師の役割としては＜退院後の生活に関する患者と家族のニーズを繰り返し確認する＞とあり、意思決定支援が一度だけでなく、繰り返し行う必要性についても学習できていた。視聴覚教材は、「医師からの病状説明」「患者家族の不安への看護師の対応」及び「退院支援・退院調整カンファレンス」の場面を示す写真と患者家族の思いを示すセリフをつけた。この工夫により、学生は患者家族の思いを中心に、退院支援を行う重要性が理解できたと考える。

4) 退院支援に向けた看護援助について説明できる

【入院早期からの退院後の生活に向けた支援】として＜入院中から退院後の生活への影響を予測しながら援助する＞にみられるように、退院支援に向けた看護援助について学習できていた。患者と家族の意思決定支援については、【患者と家族の退院に関する意見調整をする支援】として＜患者と家族が退院の意向を共通認識できるように働きかける＞＜家族が患者の状態を医療者と共通認識できるように関わり続ける＞援助を理解できていた。本教育実践前に、学生は病棟実習を終えており、実際に患者と家族の意見が一致しない現状

を知る機会があったことと推察する。意見交換会において、学生は実習体験を通じた退院支援に関する疑問をまとめ、看護師の意見を聴くことで退院に向けた看護援助の理解が深まったと考える。

5) 退院支援で連携する職種や役割について説明できる

【退院支援のしくみを円滑に運用するために必要なこと】として＜多職種の専門性を理解して多職種連携を図る＞＜患者・家族と多職種で目指す方向性を統一する＞にみられるように、退院支援に携わる多職種全体が注意を向けるべき内容について学習していた。しかし、職種ごとの役割と機能については具体的な学びが見られなかった。今回の教育実践で用いた視聴覚教材は、「退院支援・退院調整カンファレンス」のイメージ写真の中に退院支援に携わる職種を示したが、退院支援カンファレンスにおいて各職種がどのような視点から発言をしているのかまでは提示していない。このことは、職種ごとの役割と機能を深く理解するに至らなかった要因の一つと考えられる。

6) 患者に必要な医療・介護が継続して提供するための方法について説明できる

【退院支援のしくみについて】を＜外来から入院・退院における継続的な支援である＞として学習していた。看護師の役割としても、【退院後の生活を考慮した情報提供や支援】を示す＜患者の強みを生かしたセルフケアを行うよう促す＞＜退院後も患者が生活を継続できるように支援する＞＜退院後も継続した支援を提供できるような体制を多職種と共に整える＞という項目を学習できていた。視聴覚教材の「退院支援・退院調整カンファレンス」や「退院前訪問」を視聴したことにより、退院後も必要なケアが継続することの必要性を理解できたのではないかと考える。

7) 多職種で取り組む退院支援のプロセスが整理できる

学生の実習記録を分類整理した大項目では、【退院支援のしくみについて】を示す記載内容が最も多かった。退院支援は、退院後も医療管理や看護・介護が必要な状況である高齢者の「退院後も継続するであろうと予測できる問題」について、入院時からアセスメントを行い、その人が望む生活の場に移行するまでのプロセス全体を支援すること（亀井，2023）である。この退院支援のプロセス全体において、＜患者が退院するまでに多くの職種が関与する＞＜外来から入院・退院におけるの

継続的な支援である＞＜多職種の専門性（強み）を活かしたサービス提供である＞と概要を把握できていたのは、視聴覚教材として「A氏の入院から退院までの過程」を示したことと、個人ワークの「社会情勢と医療体制システムによる高齢患者の療養環境に与える影響」が関連していると考えられる。

8) 退院支援における看護の役割を説明できる

実習記録より整理できた看護師の役割は5つ挙げられた。そのうち、【患者と家族の気持ちを尊重した退院支援】や【患者と家族の退院に対する意見調整をする支援】を示す記述内容が最も多かった。これらの看護師の役割には、患者と家族の気持ちや意見を尊重し、両者の思いを調整するなど、対象者を中心とした退院支援が共通する学びとなっていた。山本ら（2017）は、ケアを考える前に患者・家族が「どうありたいか」を考えることは、対象者中心のケアを実現する上での基本的姿勢を養うこととなると述べている。宇都宮（2019）も、退院支援とは、患者が自分の病気や障害を理解、受けとめ（折り合いをつけながら）、どのような生活を送るのか、どこで療養するのかを、自己決定するための支援と述べている。本教育実践を通じて、学生は患者と家族のニーズの把握を基本とする、退院支援における看護師の基本的姿勢についても学ぶことができたと評価できる。

以上のように、本教育実践の学習成果が得られた理由として、次のようなことが考えられる。

本教育実践は、ICEアプローチを参考に、退院支援に関わる基礎的知識と実習体験から得た知識を関連付け、それにより退院支援に関連するグループワーク課題に応用することを意図して設計したものであった。本教育実践による学生の学びから、学習目標8つのうち7つは概ね達成しており、ICEアプローチを参考とした本教育実践の有用性が確認できた。

学習目標5)の「退院支援で連携する職種や役割について説明できる」については、各職種の役割の学びを十分に確認することはできず、学習目標の達成度は十分でなかった。この要因として、個人ワークの「A氏の退院支援に係る専門職種の役割や機能」と実習体験から得た知識との関連づけが十分でなく、グループワークにおいて応用する知識までに至っていないことが考えられた。西崎ら（2015）は、4年次統合実習において、病棟

カンファレンスや地域の多職種との退院前カンファレンスへの参加をした学生は、＜退院支援における院内外の多職種の役割を知る＞学びが得られていたことを報告している。一方、本教育実践の視聴覚教材では、A氏の退院支援カンファレンス及び退院調整カンファレンス場面を示す写真素材は掲載したが、カンファレンスに参加する多職種が専門性に基づき、どのような発言をするのか等、具体的なやり取りの場面までは示していなかった。ICEアプローチで教育設計をする際に、学習した知識同士を関連づける際の教材提示を検討する課題が示唆された。

また、本教育実践は、臨地実習期間中に退院支援に関する見学や体験が必ずしも保証されていない現状を鑑みて、学内実習の場で退院支援のプロセスに関する基礎知識を得るために考案したものでもあった。本教育実践で得られた学びには、臨地実習で得た学びと共通する点も多くあった。

竹崎ら（2020）は、地域連携実習を履修した4年次生は患者・家族の在宅療養に関する思いを理解する学びを得ていた（竹崎，2020）ことを報告している。この内容は、【患者と家族の気持ちを尊重した退院支援】と類似していた。また、西崎ら（2015）は、4年次統合実習において医療機関の退院支援部門で実習を行った学生は早期の退院支援についての学びがあったと報告しているが、これは本研究で得た【入院早期から住環境に関する情報収集をする】と一致する学びであった。本教育実践の対象は3年次生であり4年次に比べて実習科目の履修数は少なく、かつ実際の退院支援が行われている部門での見学は行っていない。このような学習状況において、先行研究と類似する学びが複数得られた本教育実践は見学実習に相当する学びを得るには妥当な方法であると考えられた。

こうした学習成果を上げられたのは、実習施設の協力のもとで、入院から退院までの退院支援を中心とした過程のシナリオを作成したことや実習施設の看護師との意見交換会を設けたことが効果的であったと考えられた。先行研究では、教員の実習指導上困難な事項として、退院支援が挙げられている（宮ら，2021）。山本ら（2017）は教員の実習指導上困難である課題に対して、現在活動している臨床家を招き、ともに授業を組み立て進捗することは効果があると述べている。本教育実践においても、視聴覚教材の作成から意見交換会

まで、実習施設の看護師とともに検討を重ねたことが、臨地での見学及び体験に相当する学習成果が得られた大きな要因と考えられた。

2. 本教育実践の学習内容について

本教育実践は、看護師国家試験受験資格を得るために妥当な知識が得られる内容であるか否かを確認した。本教育実践の学びの中項目と、「入院時の援助」「サービス利用開始時の援助」「退院支援」「看護職間・他職種間の情報共有」との関連があった。「目標の共有と評価」については「目標の共有」と類似する中項目はあったが、「目標の評価」に関する部分との関連はなかった。視聴覚資料にはA氏が入院から退院するまでの退院支援の一連の過程を示したが、退院支援の評価については含んでいなかったことが影響したと考えられた。

以上のことから、本教育実践は、看護師国家試験の出題基準の退院支援に関する小項目（キーワード）をほぼ網羅できる内容に相当しており、改善の余地はあるものの、看護師国家試験の受験に向けた学習に十分寄与できる内容であると考えられた。

3. まとめ

本教育実践により、学生は退院支援のしくみや看護師の役割の理解が深まっており、教育実践による学習成果が確認できた。学習成果が得られた理由として、ICEアプローチにより退院支援の基礎的知識と実習体験との関連づけが深まったことが考えられた。一方、学習目標の一部においては達成度が十分ではないものもあった。これらの理由として、個人ワークした内容と実習体験との関連を理解するための視聴覚教材の工夫が十分でなかったことが考えられた。また、本教育実践は臨地実習で見学・体験する代わりに、学内実習の場で退院支援のプロセスを体験し看護の役割を学ぶものであった。先行研究における退院支援実習による学びと類似するものが得られたことより、本研究は臨地実習における退院支援に関する学びに相当するものが得られると考えられた。本教育実践においては、視聴覚教材の作成から意見交換会まで、実習施設の看護師とともに検討を重ねてきた。これらは、学生が臨床現場での退院支援をイメージすることに繋がり、学習成果を得た大きな要因であることが示唆された。

Ⅶ. 限界と今後の課題

本報告は、対象となった学生の実習記録を分析したものであり、特定の個人に偏った学びである可能性もある。また、学生に視聴覚教材に対する理解度や興味関心、教材が実習目標を達成するのにどれだけ効果的であったか等の意見は聴取していない。今後は質問紙調査により学生個々の退院支援に関する基礎知識の理解度を明らかにし、教育実践に対する学生からのフィードバックを収集し、より効果的で学びやすい教育実践を目指すことが課題である。

謝辞

本研究の趣旨にご理解いただき、ご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

利益相反

本研究において開示すべき利益相反はない。

学会発表

本研究は、第25回日本赤十字看護学会学術集会にて示説発表した。

引用文献

- 厚生労働省 (2013). 社会保障制度改革国民会議 報告書 ～確かな社会保障を将来世代に伝えるための道筋.
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakuoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000014937.pdf, 2023年8月11日
- 厚生労働省 (2019). 看護基礎教育検討会 報告書.
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html, 2023年8月11日.
- 厚生労働省 (2020). 令和2年度診療報酬改定の概要 (入院医療).
<https://www.mhlw.go.jp/content/12400000/000691039.pdf>, 2023年8月11日.
- 厚生労働省 (2022). 看護師保健師助産師国家試験出題基準令和5年版.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/000958440.pdf>, 2023年8月11日.
- 亀井智子編集 (2023). 老年看護学①老年看護学 概論/老年保健. 205. メヂカルフレンド社.
- 宮うこ、川原瑞代 (2021). 実習病棟において実習指導教員が抱く退院支援に関わる指導上

の困難感. 宮崎県立看護大学看護研究・研修センター事業年報, 10, 32-40.

室田昌子, 岩脇陽子, 滝下幸栄, 山本容子, 光本かおり, 中村順子, 松岡知子 (2018). 退院支援事例をアセスメントする学習を取り入れた成人看護学実習の効果. 京都府立医科大学看護紀要, 28, 43-48.

西崎未和, 尾崎章子, 其田貴美枝, 畑中晃子, 御任充和子, 山本由香, 新井有希子 (2015). 「看護基礎教育における退院支援実習の学習成果」. 日本在宅看護学会誌, 3 (2), 74-83.

竹崎和子 (2020). 看護学生の地域連携実習における退院支援に関する学び—退院調整看護師の役割に焦点を当てて—. 第50回日本看護学会論文集 慢性期看護, 74-77.

山本容子, 岩脇陽子, 滝下幸栄, 室田昌子, 村岡和子, 光本かおり, 中村順子, 小城智圭子 (2017). 看護学士課程1年生から開始する在宅ケアに向けた継続看護の効果的な教育方法の検討. 京都府立医科大学看護紀要, 27, 71-76.

宇都宮宏子 (2019). 地域で“暮らす”そして“生きる”に伴走する医療. 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌, 28 (2), 212-216.

Young S. & Wilson R. (2000) /土持ゲーリー法一 (監訳), 小野恵子 (訳) (2013). 「主体的学び」につなげる評価と学習方法—カナダで実践されるICEモデル. 東信堂.